

故宮博物院蔵満漢合璧『鳥譜』について

柳澤 明

目次

1. はじめに——本『鳥譜』の概要——
2. 成立過程
3. 本『鳥譜』の価値
4. 結び

1. はじめに——本『鳥譜』の概要——

1-1. 所蔵状況と外形

本稿で紹介・考察の対象とする『鳥譜』は、台北と北京の故宮博物院に分蔵される計 12 冊、361 幅のものである。このうち、台北所蔵分の 4 冊 120 幅については、1997 年に『故宮鳥譜』と題して写真版が刊行され、一部は絵葉書や切手としても販売されているので、一般にもある程度知られていると思われる⁽¹⁾。本『鳥譜』の体裁について、譚怡令氏による同書の解説に基づいて概略を示すと、各冊 30 開で⁽²⁾、それぞれ図と満漢合璧の譜文からなる。図・譜文とも絹本で、サイズは縦 41.3cm × 横 43.9cm である。第一冊冒頭に捺された「重華宮鑑藏宝」から、もと重華宮に蔵されていたことがわかる。筆者は 2004 年 3 月に台北故宮博物院を訪れ、関係各位のご好意によって第一冊の原本を実見することができたので、その際に得た情報に基づいて若干の補足を加えると、譜文と図は一枚の大きな台紙の左右に貼り付けられ、画面が内側になるように折られている。元来は胡蝶装にされていたらしく、台紙背面に糊の痕が見られるが、現在は切り離されている。こうした台紙が 30 枚ずつ、2 枚の木板に挟んだ形で保管されており、木板の表面には『鳥譜 第一冊』と彫り込まれている。これは清代以来のものだとう。

(1) 『故宮鳥譜』(全 4 冊) 国立故宮博物院, 1997. なお、中華民国野鳥学会ホームページの「故宮鳥類文物特展」でも、本『鳥譜』の図の一部を見ることができる (<http://www.bird.org.tw/ebird/e-index.htm>)。

(2) 各冊 30 開 (30 幅) ならば 12 冊で計 360 幅となるはずであるが、実際には 361 幅あるのは、2-1 で詳述する『石渠宝笈統編』の記事によれば、乾隆 39 年に「類摩鳥」が増補されたからである。

一方、北京に残りの8冊が現存しているか否かについては、その時点では確たる情報がなかったが、帰国後、譚怡令氏から、本『鳥譜』の一部が北京故宮博物院絵画館で展示されているとの消息を得て、5月初めに実見することができた。しかし、8冊全体にわたって詳細に調査するには至らなかつたので、以下本稿では、主として台北所蔵の4冊について考察を進めることにしたい。

1-2. 内容

まず図についていと、ほとんどの図は、一羽～数羽の鳥が、樹上または地上に静止した姿勢で描かれており、羽を広げた構図、飛翔中の構図はほとんどない。二羽の例が目立つが、必ずしも雌雄とは限らない。雌雄が別図になっている場合もある（たとえば第三冊の「北百舌」と「雌北百舌」）。なお、実際には同種の鳥の雌雄であるが、別種として描かれている例も少なくない。描き方は細密で写実的であるが、種類によって出来不出来の差がある、何の鳥が判定に苦しむものも散見する。しかし、一見して種名同定が可能なものも多く、総じていえばかなり正確に描かれている。このことと、鳥の各部の色彩に対する譜文の記述がきわめて詳細であることを考え合わせると、第一冊冒頭の鳳や鸞はともかく、実在する多くの種類に関しては、ある時点で実物写生が行われたことは、まず確実である。ただし、後述するように、現存する『鳥譜』自体は摹本であるから、写生が行われたのは、原型成立時のことであろう。なお、樹上性の鳥は樹上に、地上性の鳥は地上に描くという姿勢はほぼ一貫している。

譜文は、当然ながらまず鳥名を挙げ、別名がある場合には列挙する。以下の本文は、大きく三つの部分に分けられる。第一に、全種類についてほぼ共通して見られるのは、上述したような色彩と形態、特に前者に関する記述である。これはときには晴（ひとみ）・暁（虹彩）・嘴から足・爪にまで及び、きわめて詳細である。こうした色彩の記述だけで、他には何もない例も少なくない。第二に、鶴（タンチョウヅル）、山鶲（サンジャク）、鶴鶲（ウズラ）のような、古来著名な鳥については、当該の鳥に関する諸書の記事が引用されている。引用書は『山海經』、『爾雅』から『本草綱目』まで多岐にわたるが、その範囲は『古今図書集成』「博物彙編・禽虫典」とほぼ共通しており、引用文自体も多くは「禽虫典」に見出すことができる。2-1で後述するように、本『鳥譜』の原型は、雍正朝以前に蒋廷錫が著した『鳥譜』に遡ると推定されるが、蒋廷錫が『古今図書集成』の主編であることを考えれば、両者はきわめて密接な関係にあるといつてよいだろう。ただし、引用文の中には、「禽虫典」に見出せないものも若干あるようだが、現時点では全体にわたって詳細な比較検討を行うには至っていないので、本『鳥譜』が『古今図書集成』のみによっているのか否かについては、結論を暫時保留しておきたい⁽³⁾。第三に、他書からの引用ではない——少なくとも引用とは明記されていない——地の文として、鳥名に関する考証や、産地・習性に関する情報が載せられている場合もある。なお、満文はおおむね漢文からの忠実な翻訳と見られるが、引用部の末尾がどこであるか等、漢文ではわかりにくい箇所を明確にするのに役立

(3) 本『鳥譜』の譜文と『古今図書集成』の関係については、江場山起氏にヒントをいただいた。記して感謝したい。

つ。

取り上げられている鳥の種類に関して言うと、鳳と鸞以外は、一応すべて実在の鳥と認められる。中国各地に野生する鳥が大半を占め、ミズナギドリ類、ウミツバメ類のような純然たる海鳥を除き、各類の鳥がほぼ漏れなく採録されていると言ってよい。一方、オウム・インコ類（約 20 種）のように、中国にはほとんど野生せず、輸入されて飼われていたと思われる鳥も、かなり収められている。配列に関しては、形態・色彩が似た鳥をまとめるという、ある種の自然分類の試みが——基準は必ずしも明確でなく、徹底されているわけでもないが——認められる。なお、360 という総数は、冒頭の「鳳」の項に、『大戴礼』の「羽虫三百六十、而鳳凰為之長」という句が引用されているので、それに合わせたものであろうが⁽⁴⁾、『本草綱目』の水禽類 23 種・原禽類 23 種・林禽類 17 種・山禽類 13 種計 76 種、『三才図会』の計 113 種と比較すれば、本譜の収録種数が際立っていることは言うまでもない。また、『本草綱目』や『三才図会』が漠然とした総称を挙げているものに対して、本『鳥譜』は種々の形容を付して細分化する例が目立ち、その程度は、ほぼ近代生物学における種(species)、場合によっては亜種(subspecies)・変種(variation)のレベルに達している。喜鶲（カササギ）を北喜鶲と（南）喜鶲に分けたり、鸕鷀（ハッカチョウ類）を体色に基づいて 4 種に分けたりしているのは、こうした細分化の最たるものである。

2. 成立過程

2-1. 满漢合璧『鳥譜』の成立

現存する満漢合璧『鳥譜』自体の成立については、さしたる困難なく確かめることができる。すなわち、『故宮鳥譜』の解説にも指摘されているように、『石渠寶笈續編』重華宮藏 12 に、「余省、張為邦合摹蔣廷錫鳥譜 十二冊」とあり、続いて次のような記載がある。

〔本幅〕絹本。十二冊。每冊三十幅。末冊三十二幅。縱一尺二寸五分、横一尺三寸。設色畫鳥属三百六十一種。右図左説。兼清漢書。……（中略。各冊の鳥名が列挙され、さらに「御製詠額摩鳥十韻」が載せられている）……

〔後幅〕臣工恭跋。右鳥譜十二冊、為図三百有六十。内府旧藏故大学士蔣廷錫設色本。乾隆庚午春、勅畫院供奉余省、張為邦摹繪、並命臣等、以圖書訳図説、系於各幀之左。迄辛巳冬竣事、裝潢上呈乙覽。凡名之訛者、音之外者、悉於幾餘、披閱舉示、復詳勘整正、并識其始末。臣等窃惟爾雅枳鳥一篇、……（中略）……臣傅恒、臣劉統勲、臣兆惠、臣阿里袞、臣劉綸、臣舒赫德、臣阿桂、臣于敏中、恭跋。

以上から、乾隆 15 年(1750)に勅を奉じて、内府旧藏の蔣廷錫『鳥譜』12 冊を、余省・張為邦の両名が摹し、傅恒等が譜文を満訳し、跋文を付して、26 年(1761)に至ってようやく完成したことが知られ

(4) ちなみに、『禽經』の冒頭にも「羽虫三百六十」とある。

る。この記事によれば、譜文の満訳はこのときはじめて付されたもので、蔣廷錫の原『鳥譜』にはなかったと考えられること、尺寸が一致することから、現存する満漢合璧『鳥譜』が乾隆 26 年に完成したこの摹本であることは、まず疑いない。

2-2. 先行する 2 つの鳥譜

本『鳥譜』が摹本であるとなれば、底本である蔣廷錫の『鳥譜』とはどのようなものであったかが、まず問題となるが、『故宮鳥譜』の解説にも述べられているように、『石渠寶笈』(初編) 御書房卷 2 には、「蔣廷錫畫鳥譜十二冊 上等宙一」と見え、次のような記事がある。

素絹本、着色畫。每冊凡三十幅。左方別幅書譜文。每冊末幅欵云臣蔣廷錫恭畫。下有臣廷錫、朝朝染翰二印。共計三百六十幅。幅高一尺七分、廣一尺二寸九分。

各冊 30 幅、12 冊計 360 幅という構成から見て、これが問題の底本であることは疑いない。蔣廷錫は言うまでもなく康熙朝末から雍正朝にかけての名臣であるが、画を善くしたことでも知られ、張庚『国朝畫徵錄』卷下には、「以逸筆写生、或奇或正、或工或率、或賦色、或暈墨、一幅中恒間出之、……無不超脱」云々と評されている。彼は雍正 10 年(1732)閏五月に大学士在任のまま卒しているから、『鳥譜』はそれ以前に作られたことになる。この原『鳥譜』が現存するか否かについては、いまのところ情報がないが、北京の故宮博物院を訪れた際、満漢合璧『鳥譜』と並んで、蔣廷錫『鶴鵠譜』が展示されており⁽⁵⁾、構図や画法には確かに相通ずるものがあった。

ところが、『石渠寶笈』(初編) には、これと密接な関係があると見られる『鳥譜』が、いま一種著録されている。すなわち、同書乾清宮卷 3 に、「余省畫鳥譜十二冊 上等黃一」と見え、次のような説明が付されているのである。

素絹本。着色畫。每冊三十幅。每冊末幅欵云臣余恭畫。下有臣余省、恭畫連印。每幅左方王國炳楷書譜文。每冊末欵云、臣王國炳奉勅敬書。高一尺二寸五分、廣一尺三寸。

余省は上述の通り、乾隆 15 ~ 26 年にかけて張為邦とともに蔣廷錫『鳥譜』を摹した当人であるし、12 冊、每冊 30 幅という構成といい、尺寸が完全に一致することといい、満漢合璧『鳥譜』にきわめて近いものであったと推定される。かつ、『石渠寶笈』(初編) の成書は乾隆 10 年(1745) であるから、それ以前に成立したことは確実である。

では、蔣廷錫『鳥譜』と余省『鳥譜』の関係は、どのように考えられるだろうか。余省は、「畫院供奉」とあることから見れば、官人ではなく宮廷に仕えた職業画家であるが⁽⁶⁾、経歴については、江蘇常熟の人で、花鳥虫魚を善くし、模写にも巧みであったこと、父珣、叔父璜も写生に長じた画家であった

(5) 展示の解説によると、『鶴鵠譜』は上下 2 冊計 40 開で、康熙帝に献呈されたものという。図のみで譜文はない。

(6) 『清史稿』卷 504、芸術 3 には、「清制、畫史供御者無官秩、設如意館於啟祥宮南、凡繪工、文史及雕琢玉器、裝潢帖軸皆在焉。……間賜出身官秩、皆出特賞」とあり、余省についても簡略な伝がある。

こと、弟禪も内廷に供奉したことが知られる程度で⁽⁷⁾、詳しいことはわからない。しかし、蔣廷錫に師事し⁽⁸⁾、また乾隆2年(1737)に内廷に入ったと伝えられることからすれば⁽⁹⁾、彼の『鳥譜』が蔣廷錫のものに先行することはありえないだろう⁽¹⁰⁾。

なお、張為邦についても、経歴は余省以上にわからないが、カスティリオーネ(G. Castiglione, 郎世寧)に師事したと伝えられることは、本『鳥譜』に見られる西洋画の影響(3-1で後述)を説明するものかもしれない⁽¹¹⁾。

以上から、満漢合璧『鳥譜』の原型が、雍正朝以前に蔣廷錫の著したものに遡ることはほぼ明らかであるが、蔣廷錫『鳥譜』が完全にオリジナルなものなのか、さらにその原型が存在したのかについては、いまのところ確かめるすべがない。また、2-1で引用した『石渠寶笈續編』の記載からすれば、満漢合璧『鳥譜』の作成に際して、譜文には満訳と同時に多少の校訂が加えられたと見られるが、それがどの程度のものであったかについても、明らかにしない。

2-3. 国立国会図書館所蔵『百花鳥図』

本『鳥譜』自体の成立過程の解明に資するところは必ずしも大きくないが、これと密接な関係があると見られる鳥譜が国立国会図書館に所蔵されているので、簡単に紹介しておきたい。問題の鳥譜は、『百花鳥図』と題するもので、国会図書館ホームページの「電子図書館：貴重書画像データベース」に収められて公開されている⁽¹²⁾。また、『図説日本鳥名由来辞典』には、収録された鳥の種名同定表もある⁽¹³⁾。この『百花鳥図』は、折本2帖で、折りたたんだ状態で縦約30cm×横約40cmの黄地の台紙に、縦約28cm×横約36cmの紙が貼付された形となっているが、紙の中央に折り目(切れ目?)が見えることからすれば、本来は綴じられていたものを解いて表装したのであろう。国会図書館のデータベースでは、表紙か

(7) 胡敬『国朝院画錄』卷上(于安瀬編『畫史叢書』上海人民美術出版社、1963所収);彭蘊森『歷代畫史集伝』卷6(『和刻本書畫集成』第12輯、汲古書院、1977所収)。

(8) 『故宮鳥譜』の解説による。なお、2-3で取り上げる『百花鳥図』の序にも、「蔣相國遊戲筆墨、剋絕古今。其得意門生余省字曾三者、長侍左右、耳濡目染、悉得画中三昧」とある。ともに江蘇・常熟出身であることも、両人の結びつきを窺わせる材料といえよう。

(9) 北京故宮博物院の展示解説による。根拠は不明。

(10) ちなみに、『国朝院画錄』卷上も、余省『鳥譜』について「案〔石渠寶笈〕續編有省与張為邦合摹蔣廷錫鳥譜、是冊殆省先專画後、又与為邦合摹也」とし、蔣廷錫『鳥譜』をまず余省が単独で摹し、後にあらためて張為邦と合摹したものだと述べている。

(11) 林莉娜「清朝皇帝与西洋传教士」『故宮文物月刊』236(20-8)、1992、42-69頁。たとえば、『清代宮廷絵画』(上海科学技術出版社、1999)に図版が収められている張為邦「歲朝図軸」を見ると、確かに立体的な画法で、カスティリオーネの作品によく似ている。

(12) http://www3.ndl.go.jp/rm/kosyo_main.html

(13) 菅原浩・柿澤亮三編著『図説日本鳥名由来辞典』柏書房、1993、609-610頁。

ら裏表紙まで、画像1コマ毎に通し番号が打たれているので、以下これによって冒頭部の体裁を示すと、01-001は表紙（青っぽい地に模様入り）、002は表紙裏である。003は扉の部分で、紙の貼付はここから始まる。中央には大きく「百花鳥圖」と書かれ、その右に「清余曾三画 張廷玉 鄭爾泰詩」、左に「馬齋冊額／文體記 驗體賦 沈鑾菴丙譜」とある⁽¹⁴⁾。以下004～007は沈鑾の序（文體記・驗體賦）で、008には馬齋・張廷玉・鄭爾泰の名と官職が列記されている。009から図と詩文が始まり、最初は孔雀の図で、配されているのは牡丹である。010には、右半に「孔雀 牡丹」と題して鄭爾泰の詩を載せ、左半に「石青 櫻桃花」と題して張廷玉の詩があり、石青の図は次の011にある。以下同様の体裁で、各帖50図ずつ、計100図と、対応する詩が収められているのである。

さて、『百花鳥図』と本『鳥譜』の密接な関係を示すのは、次のいくつかの事実である。

- ① 曾三とは余省の字に他ならない。
- ② 『百花鳥図』に見える鳥は、すべて本『鳥譜』に含まれている（【表1】参照）。鳥名が一致しないものも若干あるが、その場合でも、『鳥譜』に挙げられた別名と一致する。
- ③ 個々の図を比較すると、ほとんどの場合、鳥の配置・ポーズが酷似している（【図a】【図b】参照）。

ただし、『百花鳥図』の図は、一見して明らかのように、デッサン・筆づかい・色彩のどれをとっても、本『鳥譜』と比べればはるかに稚拙であって、余省の真筆とは考えられない。さらに、鳥に配された植物が本『鳥譜』とは異なること、譜文ではなく張廷玉・鄭爾泰の詩が付されていることからすれば、『百花鳥図』は、本『鳥譜』の成立過程と密接な関わりのある何らかの原本に基づいているとしても、単に本『鳥譜』ないしその原型を抜粋して模写したというようなものではない。しかし、原本がどのようなものであったかについては、余省が図を描き、張廷玉・鄭爾泰が詩を賦した原本なるものが果たして存在したかどうかをも含めて、いまのところ何の情報も得られていないので、今後の考究に委ねたい⁽¹⁵⁾。なお、現存する『百花鳥図』が中国と日本のどちらで作られたものかについても、決定的な証拠はないが、文字の略し方等はどちらかといえば日本風である。また、扉に「清余曾三画」とあるが、清国内で作られたとすれば、「清」の一文字だけを冠することは考えにくい。

以上のように、『百花鳥図』の由来についてはなお不明な点が多く残るが、同書は漢籍に見える鳥名に和名を当てるための工具として盛んに用いられたといわれ、有名な堀田正敦の『禽譜』（1830頃）にも、この『百花鳥図』（『百鳥図』の名で挙げられている）からの引き写しがかなり見られる⁽¹⁶⁾。このように、本『鳥譜』と系統を同じくする鳥譜が日本にもたらされて一定の影響を及ぼしたことは大変興味

(14) 沈鑾菴丙なる人物については、いまのところ調べがついていない。『国朝書畫家筆録』卷4には、同治朝頃に活動した沈鑾という画家の伝が見えるが、別人であろう。

(15) 『百花鳥図』に収められた張廷玉・鄭爾泰の詩の真正性についても、現時点では調査未了である。なお、『図説日本鳥名由来辞典』は、康熙帝の命によって余省が図を描き、雍正帝の時に完成したので、その写本が元文2年（1737）に渡来したとしている。根拠は示されていないが、余省の活動時期等からすると、この作成・渡来年代は少し早すぎるのはなかろうか。

(16) 『図説日本鳥名由来辞典』565-577頁。

深く、博物学における日中交流史の研究を深めていく上で、一つの有力な材料となりうるであろう。

3. 本『鳥譜』の価値

3-1. 絵画としての評価

本『鳥譜』の価値については、さまざまの角度から論ずることが可能であるが、まず中国における花鳥画の伝統の中では、どのように評価しうるであろうか。この分野について筆者はまったくの門外漢であるので、通り一遍のことしか言えないが、まず、本『鳥譜』の写実的で精密な画風が、いわゆる文人画とは異なる、北宋以来の院体画の系列に属することは言うまでもない。しかし、院体花鳥画の成立に大きな影響を与えたといわれる黄筌の「写生珍禽図巻」とか、有名な宋・徽宗「桃鳩図」、あるいは明の边文進や呂紀の作品と比較した場合、本『鳥譜』が、鳥の形態の捉え方、筆致の細やかさ、色使いの微妙さにおいて、それらを凌駕しているとは言いがたいであろう。一方、本『鳥譜』に、カスティリオーネらによって伝えられた西洋画の立体的な画法の影響がある程度認められることは、『故宮鳥譜』の解説にも述べられているが、たとえばカスティリオーネ自身の「畫孔雀開屏」、「仙萼長春二 薔薇鸚嘴」（ダルマエナガ）（ともに台北故宮博物院蔵）と、本『鳥譜』の「開屏孔雀」、「侶鳳連」を比べてみれば、本『鳥譜』の図は、立体感があるといつても中途半端であり、写実性・科学的正確さという点でも及ばないと言わざるをえない。要するに、本『鳥譜』は、単に絵画として見た場合、必ずしも駄作というわけではないが、独自の価値をもつ名品とも言いがたいものである⁽¹⁷⁾。

3-2. 博物学史における位置づけ

花鳥画としての評価が以上のようなものであるとすれば、本『鳥譜』の積極的意義は、むしろ博物学的側面に求めるべきであろう。先にも触れたように、本『鳥譜』の各図が、絵画としての効果、すなわち生命感・躍動感とか、装饰性といったものよりも、鳥の形態・色彩の精密な表現に重きを置いて描かれていることは明らかである。また、不吉なものとして花鳥画の画題に絶えて選ばれることのないフクロウ・ミミズクの類⁽¹⁸⁾が收められていることも、『鳥譜』が通常の花鳥画とは一線を画する存在であることを示している。譜文の方も、諸書からの引用や訛名はどちらかというと付け足しで、羽色や形態に関する淡々とした記述が主である。こうした点から見て、本『鳥譜』は、明らかに一種の博物図譜、あるいは鳥類図鑑として作られたものと言ってよい。

(17) 本節の記述は、多く宮崎法子氏のご教示に基づく。カスティリオーネの「畫孔雀開屏」図と本『鳥譜』の相違についても、氏のご指摘による。ただし、全体としての文責はもちろん筆者にある。

(18) フクロウ・ミミズクが画題として忌み嫌われたことについては、宮崎法子『花鳥・山水画を読み解く——中國絵画の意味——』角川書店、2003、137頁。

ヨーロッパでは、18世紀に至り、リンネ(Carl Linne, 1707-78)、ビュフォン(Georges-Louis Leclerc de Buffon, 1707-88)という大博物学者の登場を契機として、博物趣味が大流行を見せ、これが絵画藝術と結びついて、大部・美麗な博物図譜—図鑑の刊行が相次いだことは、荒俣宏氏による再評価以来、広く知られるようになった⁽¹⁹⁾。また、日本においても、ほぼ同時期の17世紀後半から18世紀にかけて、貝原益軒『大和本草』の出版、將軍吉宗の命による諸国物産調査等を通じて、大名から庶民に至る幅広い階層の間で博物趣味が盛り上がったこと、さらにこれと花鳥画の伝統が結びついて、多くの細密・美麗な図譜が作られたことが、博物学史、絵画史の両面から明らかにされつつある⁽²⁰⁾。ところが、日本におけるこうした博物趣味が、中国の本草学を基礎とし、とくに『本草綱目』の将来が、その流行の一つの契機となったことが指摘されていながら⁽²¹⁾、同時期の中国における博物学ないし博物図譜の状況については、必ずしも研究が進んでいないように思われる。

広く事物——特に自然界の諸物——に関する情報を包括的に収集・記録し、分類・整理するという博物学的発想は、もちろん中国においても、古い時代から見られ、『山海經』、『水經注』のような地理書、『異物志』、『南方草木状』のような地方物産志、あるいは『齊民要術』のような農書にも、その一端が認められる⁽²²⁾。しかし何といっても、中国における博物学が、いわゆる本草学の分野で特異な発展を見せたことは周知の通りであって、『神農本草』以来、多くの本草書が連綿と編まれた。こうした本草書は、薬品の原料となる動植物の図を伴うことも少なくなく、たとえば唐代の勅撰『新修本草』の付図は、彩色された見事なものであったという⁽²³⁾。宋代になると、図入り本草書のいわば決定版として、蘇頌『図經本草』が著され、その図と解説は各種の『証類本草』に受け継がれている⁽²⁴⁾。さらに、明末の李自珍『本草綱目』は、収録薬品数において最大であり、かつ各薬品に対する記述の体裁を一新したことから、画期的な意義をもつとされるが、そればかりでなく、動植物鉱物に対して限定的ながらある種

(19) 荒俣宏『図鑑の博物誌』リブロポート、1984。

(20) 西村三郎『文明のなかの博物学：西欧と日本』(紀伊国屋書店、1999) II章「花ひらく江戸の博物学」。また、秋田蘭画や狩野派の花鳥画が、各種の博物図譜——鳥譜を含む——と密接に関わっていたことが、今橋理子『江戸の花鳥画：博物学をめぐる文化とその表象』(スカイドア、1995) 第3～5章において指摘されている。

(21) 西村『文明のなかの博物学』105-112頁。

(22) 西村『文明のなかの博物学』214-222頁。『南方草木状』と『齊民要術』に関しては、小林清市『中国博物学の世界——「南方草木状」「齊民要術」を中心に——』(農山漁村文化協会、2003) 第I部『南方草木状』の研究および第II部『齊民要術』の世界』を参照。

(23) 西村『文明のなかの博物学』200頁。

(24) 同上書、200-202頁；宮下三郎「本草の図について——本草綱目附図の解説として——」(『本草綱目附図』上巻、春陽堂書店、1979、9-24頁)。

の自然分類を試みている点に、博物学的発想への一層の接近が認められるという⁽²⁵⁾。

以上のように、多くの本草書には、ある程度博物図譜に近い性格を認めるができるのであるが、本質から見れば、それらは何よりも薬品としての特徴・効能を解説するという実用的意図を主眼としている点で、ヨーロッパの博物誌とは一線を画すると言わざるをえない。一方、元・王禎『農書』、明・宋應星『天工開物』、明・趙子禎『神器譜』のように、農書や科学技術書の中にも、図解を伴うものが現れたけれども、主として人文世界の事物を扱う点、本草書と同様に実用への意識が濃厚に見られる点から、やはり純然たる博物図譜の範疇に含めるのは躊躇される。一方、おおむね宋代以降になると、より実用性の希薄な各種の譜録——植物・花卉関係が最も多い——が、主として士大夫・官僚の私撰として作られたが、大きな流行を見せるには至らず、かつ図を伴うものは稀であるという⁽²⁶⁾。ただし、明末の王圻『三才図会』(1607刊)は、天地人三界の万物のありようを万人に知らしめるという啓蒙思想に基づいて、広く各種の事物を図とともに収載しており、すぐれて博物図譜と呼びうる性格を有しているが⁽²⁷⁾、例外的存在と言ってよいであろう。

一方、やはり古くから発達した類書も、天下の事物に一定の分類をほどこし、それに関する情報を広く収録しているという意味では、博物志と一脈通ずるものがある。しかし、言うまでもなく類書の本質は、それぞれの事物に関する先行諸書の記載を網羅的に採録して提供することにあり、事物それ自体のありようを説明することにはない。たとえば、康熙年間に編纂された最大の類書『古今図書集成』には、既述のように「博物彙編・禽虫典」があり、多くの動植物が収録されているけれども、諸書からの廣大な引用は、それが真に同一の実体に関するものであるかについての考察を欠いたまま、無批判に羅列されており、しばしば相互に矛盾するので、読めば読むほど実体が遠くかんでいくような印象さえ受けれる。もちろん、こうした羅列的引用とは一線を画し、古典をはじめとする諸書に登場する諸々の事物の名を正しく解釈するために、一方でいわゆる釈名・訓詁の学が発達してくるのであって、その頂点がいわゆる清朝考証学である。しかしそれすらも、単に名前に関する自己完結的な考証——たとえば、A書に現れるxとB書に現れるx'は同一であるか否かといった——に終始し、事物の実体を直接説明するには至らない例が目立つ⁽²⁸⁾。

さて、上述のように、18世紀になると、ヨーロッパにおいても、また日本においても、博物趣味の

(25) 西村『文明のなかの博物学』203-212頁。ただし、『本草綱目』の分類法が実は客観分類と実用分類を混交したものであったことも指摘されている。山田慶児「本草における分類の思想」(『東アジアの本草と博物学の世界』上、思文閣出版、1995、3-42頁)。

(26) 西村『文明のなかの博物学』219-220頁。

(27) 西村氏は、『三才図会』に触発されて編まれた寺島良安『和漢三才図会』(1713刊)が、江戸期博物学の興隆に一役買ったことを指摘している。同上書、115-116頁。

(28) 清朝考証学のこのような傾向をするどく指摘した論考として、小林清市「清朝考証学派の博物学——『爾雅』釈草篇注を手掛りに——」(『東アジアの本草と博物学の世界』上、174-201頁；後に『中国博物学の世界』にも収録)がある。

流行と絵画芸術とが結びついて、多くの華麗な博物図譜——図鑑が生み出されるに至った。ところが、中国においてはどうであったかというと、花鳥画の長い伝統にも拘わらず、これと博物学的発想が結合した例は、多くは見出せない。『三才図会』にしても、木版本ということもあって、図の方は総じて簡略で、到底芸術品とはいえないし、科学的正確さという点でも言うに足りない。『本草綱目』に至っては、付図は後補されたものであって、特にいわゆる金陵初刊本のものは稚拙で見るに堪えない⁽²⁹⁾。清代に入っても状況は基本的に変わらず、本稿で取り上げた一連の『鳥譜』と、姉妹編ともいべき『獸譜』6冊をはじめ、宮廷内で作られたいくつものものを除けば、各種の博物図譜が広く流布した事実は知られていないのである⁽³⁰⁾。

以上を要するに、中国においては、古代から清代に至るまで、本草という特殊な分野を除けば、博物誌—博物図譜自体が一般に発達せず、かつ、ヨーロッパや日本において見られたような博物誌と絵画芸術の結合も、きわめて限定的にしか生じしなかったということになる。とすれば、本『鳥譜』を含むいくつかの宮廷図譜は、中国の博物学史および絵画史の中で、かなりユニークな位置を占める存在と言えるのではなかろうか。しかも、本『鳥譜』の祖形と考えられる蒋廷錫『鳥譜』が、康熙朝末ないし雍正朝に成立していることは、中国における本格的博物図譜が、日本での隆盛よりもやや早い時期に萌芽したことを見ている。にもかかわらず、その後中国においては、日本におけるような大流行が見られなかった理由は何であろうか。康熙～乾隆朝にかけて得られた科学技術上の諸成果が、宮廷一権力機構の内部に封じ込められて一般に流布せず、それ以上の発展を見ないまま、近代に至って時代遅れになっていくという現象は、たとえば地図・兵器・医学等の分野についても認められるが、博物学についても、同様の事情を想定することができるかもしれない。ただし、地図・兵器等の発展に関しては、主として宣教師の媒介による西洋科学の影響があったわけであるが、博物学ないし博物図譜について同様のことが言えるかどうかについては、にわかに判断するだけの材料を持たないので、今後の課題としたい。

3-3. 「名物学」への寄与

3-3-1. 図鑑としての評価

博物図譜——図鑑には、単に眺めて楽しむという読み方もあり得ようが、その主要な機能は、諸物の名前と実体を、図を媒介として一致させること、すなわち、図を介して名前から実物を知る、あるいは

(29) 『本草綱目附図』上巻。宮下三郎氏による同書の解説「本草の図について」をあわせて参照。

(30) なお、宮廷で作られた図譜類の中には、『皇清職貢図』のように、人間世界を対象とするものもあるが、こうしたものも一種の博物図譜と言えるかもしれない。一方、宮廷所蔵文物の絵入り目録である『西清硯譜』や『陶瓷譜冊』の類も、ヨーロッパ流の博物図譜とは本質的に異なるが、宮廷絵画としての位置づけにおいては、『鳥譜』等と同列に置きうるであろう。

は逆に実物から名前を知るというところにある。こうした「名物学」⁽³¹⁾のための工具として、本『鳥譜』はどの程度に評価できるものであろうか。それは、細かく言えば、①本『鳥譜』の図および形態・色彩等に関する説明が、どれだけ正確に実在の鳥を表現しているか；②描かれた実物と名前の結びつけ方が妥当であるか否か；という二つの問題からなる。

まず前者について見よう。すなわち、本『鳥譜』の図と説明を、どれだけ現行の記述・分類体系による鳥名と結びつけることが可能か、ということである⁽³²⁾。『故宮鳥譜』の各冊末尾には、譜文の鳥名と現行鳥名（漢名・英名・学名）を対照した「鳥類古今名称参照表」が掲げられている。台湾大学の専門家の考証に基づくということなので、異を唱えるのは気が引けるが、明らかに疑問があるものについては私見を示し、筆者なりに整理したのが【表1】である。もちろん、筆者の力量では何としても同定できないもの、疑問符つきのものも少なくないが、それでも検討した120図のうち約90図、75%を、ほぼ確実に現行分類体系における「種」ないし「亜種」に当てはめることができた。これは、本『鳥譜』の作られた時代を考えれば、かなりの高率と言えよう。実際、大部分の鳥に関しては、図と譜文の説明はその鳥の特徴をほぼ的確に捉えており、さしたる困難もなく種名を割り出すことができた。一方、同定困難なものについて見ると、近似種が多く存在するグループについて、区別のポイントとなる微妙な特徴が図や譜文に表現されていないために、種までは特定できないというケースが多い。鸕鷀（モリハッカ？）、海八哥（シロチドリ？）、石畫眉（メボソムシクイ類？）、花黃燕（ヒイロサンショウクイ？）等はそうした例である。これは要するに記述・分類の精粗の差に起因するのであって、現在でも、種や亜種の区分については異なる見解が併存しているのだから、怪しむに足りない。このことをもって、ただちに本『鳥譜』の図や説明が拙劣であるなどとは言えないである。

一方、後者の問題、すなわち実物（図）と名前の結びつけの妥当性ということを考えてみると、それを厳密に検証することは、実はきわめて難しい。その最大の理由は他でもなく、少なくとも現在知られている限り、本譜が前近代中国におけるほぼ唯一無二の網羅的鳥類図譜だというところにある。前述のように、多くの種については、譜文には単に名前と色彩・形態の記述しかないが、そうした鳥については、図はもとより、名前自体も他書に見えない例が多いので、比較対照すべき材料がない。このような場合、本『鳥譜』の鳥名の当た方がどの程度普遍性を有していたかを検証することは、ほとんど不可能であろう。しかも、本『鳥譜』は鳥を細かく分類してそれぞれに名前を付す指向をもっているため、総称的な鳥名の前に種々の形容を加える例が多く見られる（たとえば「沈香色八哥」、「秋香色八哥」、「牙色裏毛大白鸕鷀」等）。こうした名前は、本『鳥譜』——あるいはその原型——が編まれる際に新たに創造された可能性があり、もしうだとすれば、当否をあげつらうこと自体無意味であろう。

(31) 中国の鳥に関する実体と名前の結びつけの誤りが、近年の辞典においても多く見られること、「名物学」の深化が急務であることは、池本和夫「中国語の鳥類名をどう訳すか」『研究紀要－人文学部－』（明星大学）32, 1996, 13-22頁；同「中国語辞典と名物学」『東方』187, 1996）において指摘されている。

(32)もちろん、現在の記述・分類体系と完璧なものとは言えないが、18世紀当時より精密なことは確かだから、取りあえず現行体系を基準として話を進める。

一方、古来広く知られ、種々の文献に登場する鳥名に関しては、諸書からの引用と、場合によっては若干の独自の考証が加えられているが、それにも問題がある。と言うのは、こうした引用や考証が、対象物の実体から遊離したまま自己完結してしまうという、前述したような中国の釈名・考証学の通弊を免れていない例がまま見出せるからである。各論に踏み込むと際限がなくなるが、典型的な例を一つ挙げてみよう。本譜の第二冊には「鳳凰鸕鷀 一名時樂鳥」の図が載せられているが、この図は一見してコンゴウインコ (*Ara macao*) とわかる。一方、譜文には、唐・張説の「形貌乍同鸕鷀類、精神別稟鳳凰心」なる詩句、『西陽雜俎』所載の「開元中、有五彩鸕鷀能言、上令左右試牽帝衣、鳥輒嘔目叱咤。岐府文学能延京獻鸕鷀篇、以贊其事。張説獻時樂鳥篇、其序云……」なる故事、さらに『南史』の「扶南國出五色鸕鷀」、『南州異物志』の「杜薄州出五色鸕鷀、性尤慧解」なる記事が引かれている。ところが、ここに出てくる「時樂鳥」や「五色鸕鷀」が、図に描かれた「鳳凰鸕鷀」に他ならないとなぜ言えるのかという、われわれから見れば一番肝腎なポイントについては、「毛色煥爛、五采畢備」や、上記の張説の詩句を引いた直後にある「此鳥真足當鳳凰之名」という表現などに、関連づけへの指向が若干感じ取れないこともないが、およそ積極的な論証はなされていない。実際には、コンゴウインコは南アメリカ原産の鳥であるから、『西陽雜俎』や『南史』に登場する「時樂鳥」や「五色鸕鷀」はコンゴウインコではあり得ないのだが⁽³³⁾、結果としての当否はともかく、「時樂鳥」 = 「五色鸕鷀」 = 「鳳凰鸕鷀」であることを疑問の余地なく論証しよう、すなわち名前と実体とを結びつけようという意識自体が希薄なことに、ある種の歯がゆさを感じずにはいられない。こうした問題があるために、図と形態・色彩に関する説明が総じてよい出来映えであるにもかかわらず、古今の諸書によく見かける鳥名の実体を突きとめようという場合、本『鳥譜』は必ずしも決定的な根拠とはなりえない。なお、本『鳥譜』の鳥名の中には、もちろん現在普通に使われている鳥名と一致するものも少なくないが、図を見ると、実体が異なっている例もあり、注意が必要である。たとえば、本『鳥譜』第一冊には「灰鶴」が収められているが、「灰鶴」は現在ではクロヅル (*Grus grus*) を指すので、『故宮鳥譜』の「参照表」もクロヅルとしている。しかし、図を見る限り、これは明らかにナベヅル (*G. monacha*) である。

本『鳥譜』における鳥名と実体の関係は、少なくとも当時の宮廷人が持っていた知識・解釈を反映していることは疑いないのだから、中国の鳥に関する「名物学」を深めていくための一つの有力な手がかりとはなるであろうが、同時に、以上に述べたような種々の問題を伴っていることも弁えておかなければならない。

3-3-2. 滿文鳥名について

本『鳥譜』のユニークな特徴の一つは、満漢合璧という点にあるが、満文部分には一体どのような価値を見出すことができるであろうか。譜文全般の検討は他日を期すこととして、取りあえず鳥名について考えてみたい。本『鳥譜』の満文鳥名は、「灰色洋鶴」を “fulenggingge namu kuwecike” としている例

(33) ちなみに、宋・徽宗作といわれる「五色鸕鷀図鑑」(ボストン美術館蔵)の「五色鸕鷀」は、ズグロゴシキセイガイインコ (*Trichoglossus ornatus*) と見られ、コンゴウインコとはまったく異なる。

のように、明らかに漢文からの直訳と見られるものもあるが、本来の満洲語名を当てたと見られるものも少なくない。鶴=bulehen (タンチョウヅル)、灰鶴=kürcan (ナベヅル) 等はその例である。こうした例を拾っていけば、満洲語における「名物学」に寄与するところは小さくないはずである。ただ問題となるのは、第一に、鳥名の上に種々の形容詞が加えられている場合である。たとえば小灰鶴=ajige kürcan (アネハヅル) の場合、満洲語にもとからそういう語彙があったのか、それとも漢語の「小」に合わせて、“ajige”を冠したのか、にわかに判定しがたい。第二の問題は、本『鳥譜』が作られた乾隆朝前半は、従来の漢語からの音訛語に代わって、あらたな「満洲語らしい」語彙が創造されていた時代であるから、一見本来の満洲語らしく見える鳥名でも、二次的に作られた可能性がある、ということである。

本『鳥譜』に見える満洲語鳥名を、旧来のものと新しい人工的なものに分別するための一つの方策として、本『鳥譜』の前後に成立した各種辞書に登録された鳥名との比較が考えられる。網羅的な比較を行う余裕はないが、試みに、康熙 22 年(1683)序『大清全書』、乾隆 15 年(1750)序『清文彙書』、乾隆 36 年(1771)序『御製増訂清文鑑』、および乾隆 51 年(1786)序『清文補彙』を用いて、本『鳥譜』第一～四冊の 120 種について、登録の有無を調べてみたのが【表2】である。この表から直ちに導き出せるのは、『増訂清文鑑』(補編を含む) と本『鳥譜』の一一致率がきわめて高いという事実である。オウム・インコ類のように、種々の形容がついて細分化されているグループがかなり欠けていることを除けば、主要な鳥名のほとんどは『増訂清文鑑』に見えているといってよい。対応する漢語名も、若干の例外を除いて一致する。『清文補彙』になると、オウム・インコ類もかなり加わって、一致率はさらに高くなる。これに対して、『大清全書』に見出せる鳥名は、わずか 10 種にも満たない。『清文彙書』では若干増えるが、それでも本『鳥譜』の満文名とぴったり一致するのは 17 種程度に過ぎない。語訛を見ても、漢語鳥名は本『鳥譜』とはほとんど一致しないし、それどころか、たとえば “hongko cecike” の語訛「雀名胸黄腰背畧青叫声如燕子。比 honggon cecike 畧小」のように、漢語名がまったく当てられていない例も多い。以上のような状況と、本『鳥譜』の満文が、蔣廷錫『鳥譜』を摹絵する際にあらたに付されたものであることを考え合わせれば、『大清全書』や『清文彙書』に見えない多くの鳥名は、本『鳥譜』編纂の際に新規に考案され、後に『増訂清文鑑』や『清文補彙』に取り入れられたのではないか、との推定が成り立つ。もちろん、従来から存在した鳥名についても、対応する漢語名をあらたに検討し確定する作業——たとえば “hongko cecike” を「柿黄」(マミジロキビタキ) に当てるといったような——が並行して進められたであろう。

以上のことと踏まえた上で、『清文彙書』や『大清全書』に見える鳥について、本『鳥譜』の図から実体を割り出していくと、確かにその多くは東北地方に自然分布するもので(たとえば isha = カケス, jinjiba = チョウセンメジロ, calihūn = ベニヒワ, meihe cecike = アリスイ等)、満洲人が早くから接し、名づけていた鳥の範囲というものが、おぼろげながら浮かび上がってくる。ただし、中には満洲語名と実体(図)の結びつけ方が妥当かどうか、心許ない例もある。たとえば、『清文彙書』は、“jingjara”, “jeleme cecike”, “fiyasha cecike”, “bunjiha”をすべて「家麻雀」としているが、本『鳥譜』は前三者を「五道眉」(ヒゲホオジロ), 「偷倉」(コシジロキンバラ), 「嘉雀」(スズメ)に当て、別の種類としている(bunjiha

は本『鳥譜』の第一～四冊には見えない⁽³⁴⁾。この名前の當て方が正しいかどうかは、何とも言えない。特にコシジロキンパラは南方の鳥であるから、本来 *jeleme cecike* がこの鳥を指していたかどうか、かなり疑わしい。本『鳥譜』における名前と実体の結びつけの妥当性・普遍性の検証が難しいことは、漢語名に関してすでに 3-3-1 で述べたが、満洲語名についても同様のことが言えるのである。

もちろん、あらたに作られたり、あるいは當て方を誤つたりした鳥名も、どれだけ一般に普及したかは疑わしいにせよ、本『鳥譜』に収められ、『增訂清文鑑』等に取り入れられた以上は、いわば清朝公認のものである。従って、たとえば満和辞典を編纂しようという場合には、当然採録されることになる。その際、適切な訳語を当てるためには、やはり本『鳥譜』を必ず参照しなければならないことは言うまでもない。こうした面においても、本『鳥譜』の満文がもつ意義は決して小さくはないのである。

3-4. 清朝宮廷における鳥

本『鳥譜』の図のほとんどは、前述のように、ある時点で行われた実物写生に基づいているはずである。いつ誰が写生したのか、確実なところは明らかにしがたいが、内廷あるいはそれに近いところでなされたと仮定すれば、本『鳥譜』に収録された鳥は、当時の清朝宮廷人が何らかの形で接することができた種類ということになる。そのような目で、あらためて全体を眺めわたしてみると——北京所蔵の 8 冊については検討が不十分であるが——、大体の傾向として、東北・華北から東南沿海地方にかけて産する鳥が多数を占めることがわかる。中国西南部（特に雲南）と新疆は、特異な鳥種が多数生息することで知られるが、それらはほとんど収められていない。これは、当時の清朝の版図、北京の宮廷に鳥がもたらされうる範囲を考慮すれば、ほぼ自然なことといえる。また、ワシタカ類（約 30 種）、ガンカモ類（約 40 種）、キジ類（約 30 種）が特に多いのは、狩獵等を通じてなじみ深かかったからであろう⁽³⁵⁾。

一方、本来中国に産しない、飼養のために輸入された鳥も注目に値する。既述のように、本『鳥譜』には、オウム・インコ類の図が 23 ほど収められているが、同定困難なものや、同種の雌雄が別図になっているもの等を除いた 18 種について見ると、中国内に自然分布するものも 3 種ばかりあるが、他はインドから東南アジア大陸部を主産地とするものが 4 種、アフリカ産のものが 1 種、モルッカ諸島など東南アジア島嶼部からニューギニアにかけて分布するものが 8 種、中央～南アメリカ産のものが 2 種である。後二者は、言うまでもなくオランダ、スペインの手を通じてもたらされたものであろう。また、アフリカ産のヨウム（灰色洋鸕鷀）については、譜文に「此種粵志皆諸書不載、新從海洋來者」とある。一方、オーストラリアはオウム・インコ類の大産地であるが、オーストラリア本土を主産地とする種類は収められていない。このあたりに、当時の北京宮廷を取り巻く交易圏の広がりと限界が窺えるのではなかろうか。

(34) ちなみに、『清文補彙』の“jingjara”の項を見ると、「五道眉。本旧語与 *fiyasha cecike* 等四句通曰家雀。今各分定」とある。

(35) 日本においても、江戸時代に成立した多くの鳥譜と、大名の狩獵活動の間に密接な関係があったことが指摘されている。今橋『江戸の花鳥画』第 6 章。

また、特定の鳥に関して、清朝宮廷人の抱いていた特殊な観念が窺われる例もある。本『鳥譜』は、既述のように各類の鳥をほぼ漏れなく収録しており、吉祥・不吉といったことに特にこだわっているようには見えない。しかし、たとえば喜雀（カササギ）について、本『鳥譜』は北喜雀=amargingge saksahaと喜雀=saksaha（譜文には南喜雀=juleringge saksahaとある）の二種に区別している。譜文によると、北喜雀は南喜雀に比べて嘴が太く、体が大きくて尾も太く、背（正確にいえば肩羽）の白毛が少ないのである。現在の分類によれば、カササギ(*Pica pica*)には確かにいくつかの亜種があるが、東北や華北に分布するのは*P. p. sericea*で、中国東南部に分布するものと同じとされている。一方、東北西北部からモンゴルにかけては、別亜種*P. p. leucoptera*が分布するが、その主な特徴は、肩羽の白色部の大小ではなく、初列風切の白色部が大きいことにあるらしいので、いずれにせよ譜文の記述とはうまく符合しない³⁶。しかし、そうしたことはともかく、清朝においてカササギが特別に神聖視されていたことを考えると、本『鳥譜』がわざわざ二種に分けていることは、カササギに対する独特のこだわりを示しているとも言えそうである。

本『鳥譜』に対する研究をさらに深めていけば、以上の他にも、清朝宮廷と鳥との関わりをめぐる様々な興味深い事象を掘り起こすことができるのではないかと期待されよう。

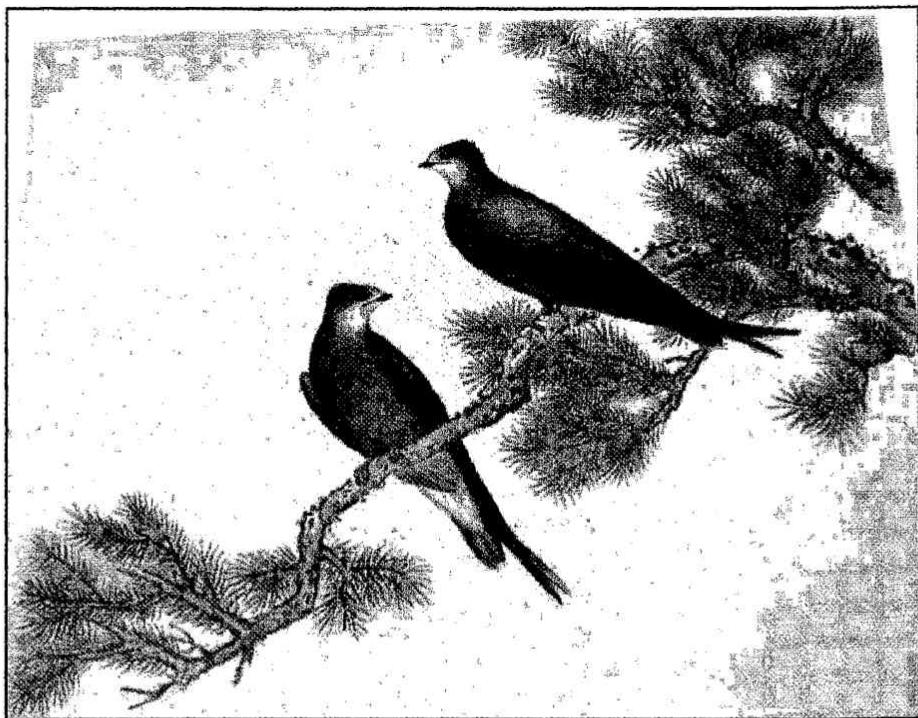
4. 結び

以上、故宮博物院藏満漢合璧『鳥譜』について、その成立過程と価値を中心に、若干の考察を試みた。何分にも不案内な分野であることから、明確な結論を導き出すに至らず、単なる問題提起に終わった部分も少なくない。また、北京の故宮博物院を訪れた際、本『鳥譜』と姉妹編の『獸譜』、また前述した蔣廷錫『鶴鶩譜』と並んで、『海錯画譜』、『鶴譜』等、清代に民間や宮廷で描かれたいくつかの図譜が展示されていた。こうした各種図譜の全体としての数量や相互関係についても、当然考究すべきところであるが、本稿ではまったく踏み込むことができなかった。このように不備の多い内容ではあるが、今後の清代博物学——博物図譜史研究の進展のための叩き台ともなれば幸いである。

なお、本稿の執筆に当たっては、台北故宮博物院の莊吉発氏、馮明珠氏、劉芳如氏、譚怡令氏に一方ならぬご教示とご助力をいただいた。また、竹下信雄氏からは貴重な文献を拝借した。記して謝意を表したい。記して謝意を表したい。

(YANAGISAWA, Akira 早稲田大学文学部)

(36) 鄭作新『中国鳥類分布名録』（第二版）科学出版社、1976；東北保護野生動物聯合委員会『東北鳥類』遼寧科學技術出版社、1988；約翰・馬敬能(John MacKinnon)他『中国鳥類野外手冊』湖南教育出版社、2000。



【図a】『鳥譜』の「石燕」（部分）(5-27, 北京故宮博物院蔵)



【図b】『百花鳥図』の「石燕」（国立国会図書館ホームページ
「貴重書画像データベース:百花鳥図」第2帖〈02-069裏〉より転載）

【表1】鳥名同定

卷-№.	漢語名	鳥類古今名称参照表	学名	和名	百花鳥図
01-01	鳳				1-012
01-02	鷺				2-004
01-03	孔雀	綠孔雀	<i>Pavo muticus</i>	マクジャク	1-010
01-04	開屏孔雀	綠孔雀(公鳥)	<i>Pavo muticus</i>	マクジャク	
01-05	鶴	丹頂鶴	<i>Grus japonensis</i>	タンチョウヅル	1-060
01-06	灰鶴	灰鶴	<i>Grus nigricollis</i>	ナベヅル*	1-038
01-07	小灰鶴	蓑羽鶴	<i>Anthropoides virgo</i>	アネハヅル	
01-08	藍	白鶴	<i>Grus vipio</i>	マナヅル*	
01-09	北喜鵲	喜鵲(新疆亜種)	<i>Pica pica</i>	カササギ	
01-10	喜鵲	喜鵲(東北亜種)	<i>Pica pica</i>	カササギ	2-072(南喜鵲)
01-11	山喜鵲	灰喜鵲	<i>Cyanopica cyana</i>	オナガ	
01-12	白喜鵲			カササギの白化個体?	
01-13	山鶲	紅嘴藍鶲	<i>erythrorhyncha</i>	サンジャク	
01-14	黒山鶲	灰樹鶲		?	
01-15	靛花	藍磯鶲		?	
01-16	石青	紫嘯鳥	<i>Myophonus caeruleus caeruleus</i>	オオルリチョウ	1-011
01-17	鸕鷀	林八哥	<i>Acridotheres grandis?</i>	モリハッカ?	2-013
01-18	沉香色八哥	八哥	<i>cristaellus?</i>	ハッカチョウ?	
01-19	秋香色八哥	家八哥之変種	<i>Acridotheres tristis?</i>	カバイロッカ?	
01-20	白八哥			白化個体?	1-063
01-21	花八哥	黑翅椋鳥	<i>Sturnus melanopterus</i>	ソデグロムクドリ	
01-22	燕八哥	白頰椋鳥	<i>Sturnus cineraceus</i>	ムクドリ	
01-23	山八哥	樹鶲	<i>Dendrocitta formosae</i>	タイワンオナガドリ	
01-24	海八哥	蒙古鶲	<i>Charadrius alexandrius</i>	シロチドリ?*	
01-25	番八哥	大擬啄木鳥	<i>Megalaima virens</i>	オオゴシキドリ	
01-26	白哥	黑領椋鳥(母鳥)	<i>Sturnus sturnius?</i>	シベリアムクドリ♀?*	
01-27	瑞紅鳥	爪哇雀	<i>Padda oryzivora</i>	ブンチョウ	2-076
01-28	灰色洋鴿	灰林鴿	<i>Columba livia var. domestica?</i>	ドバト?*	
01-29	鶴鴿	白鴿		飼養品種?	1-069
01-30	毛脚鴿			飼養品種?	
02-01	西綠鸕哥	紅領綠鸕鷀(母鳥)	<i>Psittacula krameri</i>	ホンセインコ♀	
02-02	南綠鸕哥	灰頭鸕鷀(公鳥)	<i>Psittacula alexandri</i>	ダルマインコ♂*	1-021/1-024
02-03	黑嘴綠鸕哥	黑嘴綠鸕鷀(公鳥)	<i>Psittacula alexandri</i>	ダルマインコ♀*	
02-04	洋綠鸕鷀	洋綠鸕鷀(公鳥)	<i>Eclectus roratus</i>	アカムラサキインコ♂*	
02-05	洋綠鸕哥	洋綠鸕哥(母鳥)	<i>Brotogeris versicolurus</i>	キソティンコ*	1-018
02-06	紅頬綠鸕哥	紅頬鸕哥(公鳥)	<i>Psittacula longicauda</i>	オナガダルマインコ♂	
02-07	柳綠鸕哥	柳綠鸕哥(公鳥)	<i>Psittacula eupatria</i>	オオホンセインコ♂	
02-08	牙色裏毛大白鸕鷀	金剛鸕鷀(公鳥)	<i>Cacatua moluccensis</i>	オオバタン*	1-023
02-09	葵黃裏毛大白鸕鷀	金剛鸕鷀(母鳥)	<i>Cacatua alba</i>	タイハクオウム*	
02-10	葵黃頂花小白鸕鷀	金剛鸕鷀(小種)(公鳥)	<i>Cacatua sulphurea</i>	コバタン*	1-020(黄頂小白鸕鷀)
02-11	牙色頂花小白鸕鷀	金剛鸕鷀(小種)(公鳥)	<i>Cacatua sulphurea citrinocristata</i>	コキサカオウム*	

02-12	鳳凰鸚鵡	鳳凰鸚鵡	<i>Ara macao</i>	コンゴウインコ*	
02-13	金頭鸚鵡	金頭鸚鵡	<i>Amazona ochrocephala</i> <i>ortatrix</i>	オオキボウシインコ	
02-14	青頭紅鸚哥	青頭紅鸚哥	<i>Lorius domicellus</i>	ズグロインコ	
02-15	綠翅紅鸚哥	綠翅紅鸚哥(公鳥)	<i>Lorius garrulus</i>	ショウジョウインコ*	1-015
02-16	翠尾紅鸚哥		<i>Alisterus amboinensis</i>	オウインコ	
02-17	蓮青鸚鵡		<i>Eclectus roratus</i>	アカムラサキインコ♀*	1-026(青蓮鸚鵡)
02-18	黃鸚哥			?	1-014
02-19	灰色洋鸚哥	非洲灰八哥	<i>Psittacus erithacus</i>	ヨウム	1-017
02-20	黃丁香鳥	黃愛情鳥	<i>Trichoglossus</i> <i>haematodus</i>	ゴシキセイガイインコ*	2-006
02-21	綠丁香鳥	綠愛情鳥	<i>Trichoglossus sp.</i>	セイガイインコsp.*	
02-22	了哥	鸚哥	<i>Gracula religiosa</i>	キュウカンチヨウ	2-037
02-23	山鸚哥	三宝鳥(佛法僧)	<i>Eurystomus orientalis</i>	ブッポウソウ	
02-24	倒挂鳥	短尾鸚鵡	<i>Loriculus vernalis</i>	ミドリサトウチヨウ	2-025(倒挂鳥一名綠毛玄鳳)
02-25	黑背倒挂	黑背短尾鸚鵡	<i>Loriculus galgulus</i>	サトウチヨウ*	
02-26	珊瑚鳥	白喉笑鶲	<i>Garrulax chinensis</i>	タイカンチヨウ	1-044
02-27	黃山鳥	領笑鶲	<i>Garrulax pectoralis</i>	クビワガビチヨウ*	1-033(黃山鳥鳥)
02-28	綠山鳥	藍綠鶲	<i>Cissa chinensis</i>	ヘキサン	2-052
02-29	松鴉	松鴉(東北亞種)	<i>Garrulus glandarius</i>	カケス	
02-30	白松鴉	松鴉(北京、甘肅亞種)	<i>Garrulus glandarius</i>	カケス	
03-01	金翅	黑頭金翅雀	<i>Carduelis sinica</i>	カワラヒワ*	1-032
03-02	柿黃	白眉鶲	<i>Ficedula zanthopygia</i>	マミジロキビタキ	
03-03	黃道眉	黃喉鶲(公鳥)	<i>Emberiza elegans</i>	ミヤマホオジロ♂	1-068
03-04	淡黃道眉	黃喉鶲(母鳥)	<i>Emberiza elegans</i>	ミヤマホオジロ♀	
03-05	五道眉	灰眉岩鶲(北疆亞種)	<i>Emberiza cia</i>	ヒゲホオジロ	
03-06	白道眉	灰眉岩鶲(華北亞種)	<i>Emberiza cioides</i>	ホオジロ*	
03-07	畫眉	畫眉(海南亞種)	<i>Garrulax canorus</i>	ガビチヨウ	2-033
03-08	石畫眉	寶興雀鶲	<i>Phylloscopus sp.</i>	メボソムシクイsp.?*	
03-09	山畫眉	大草鶲	<i>Garrulax davidi</i>	キタガビチヨウ*	
03-10	燕雀	花雀	<i>Fringilla montifringilla</i>	アトリ	
03-11	白花雀	葦鶲	<i>Emberiza pallasi</i>	シベリアジュリン	
03-12	山花雀	黍鶲	<i>Monticola sp.</i>	イソヒヨドリsp.♀*	
03-13	金雀	黑臉鶲(日本亞種)	<i>Emberiza aureola</i>	シマアオジ*	
03-14	侶鳳速	棕頭鶲雀(粉紅鸚嘴)(四川亞種)	<i>Paradoxornis</i> <i>webbianus</i>	ダルマエナガ	1-062
03-15	南相思鳥	紅嘴相思鳥	<i>Leiothrix lutea</i>	ソウシチヨウ	2-031
03-16	粉眼	暗綠繡眼鳥(綠繡眼)	<i>erythrocercus</i> <i>erythroleura</i>	チヨウセンメジロ*	
03-17	金眼	金眶鶲(小環頸鶲)	<i>Charadrius dubius</i>	コチドリ	
03-18	囁叭嘴	橫斑鶲		?	
03-19	槐串	暗綠柳鶲	<i>Phylloscopus inornatus?</i>	キマユムシクイ?*	2-021(槐串一名銅鈴)
03-20	金鈴	黃嘴朱頂雀		?	
03-21	白頭金鈴	白頭金翅雀	<i>Carduelis sinica?</i>	カワラヒワ?	
03-22	太平雀	太平鳥	<i>Bombycilla garrulus</i>	キレンジャク	
03-23	太平雀	小太平鳥(朱連雀)	<i>Bombycilla japonica</i>	ヒレンジャク	2-078(十々紅即太平雀)
03-24	珠頂紅	火冠雀	<i>Acanthis flammea</i>	ベニヒワ*	1-080
03-25	花紅燕	長尾山椒鳥(公鳥)	<i>Pericrocotus ethologus</i>	オナガベニサンショウウク イ♂	2-015(花紅燕一名赤鸚一名朱衣)
03-26	花黃燕	長尾山椒鳥(母鳥)	<i>Pericrocotus flammeus</i>	♀?*	2-018(華黃燕)
03-27	山花燕	仙鶲(仙鶲之一種)	<i>Phoenicurus auroreus</i>	ジョウビタキ?*	2-036(山花燕一名五色子)
03-28	南百舌	烏鵲(四川亞種)	<i>Turdus merula</i>	クロウタドリ	
03-29	北百舌	(白翅藍鵲)	<i>Turdus boulboul</i>	ハイバネツグミ♂*	

03-30	雌北百舌	(白翅藍鶲)	<i>Turdus boulboul</i>	ハイバネツグミ♀*	
04-01	藍鶲類	白腹姬鶲(白腹琉璃)(北亞種)	<i>Cyanopitta cyanomelana</i>	オオルリ	
04-02	黑鶲類	白喉石[即+鳥]	<i>Saxicola torquata</i>	ノビタキ	
04-03	紅鶲類	紅喉歌鶲(野鶲)	<i>Erithacus calliope</i>	ノゴマ?	1-045
04-04	白鶲類	紅脣藍尾鶲(藍尾鶲)(西南亞種)	<i>Tarsiger cyanurus?</i>	ルリビタキ	
04-05	靠山紅	朱雀	<i>Carpodacus erythrinus</i>	アカマシコ	2-060
04-06	金絲麻鶲	黃雀		カナリア類か?	
04-07	黃鸝	黑枕黃鸝	<i>Oriolus chinensis</i>	コウライウグイス	2-040
04-08	鶯雛	黑枕黃鸝(幼鳥)	<i>Oriolus chinensis</i>	コウライウグイス(幼鳥)	
04-09	蛇頭鳥	蠟鶲(地啄木)	<i>Jynx torquilla</i>	アリスイ	
04-10	白頭翁	白頭鵙	<i>Pycnonotus sinensis</i>	シロガシラ	1-028
04-11	白頭郎	小燕尾(小剪尾)	<i>Oenanthe hispanica</i>	カオクロサバクヒタキ (セグロサバクヒタキ)*	
04-12	雙喜	黑頭燕尾	<i>Enicurus leschenaulti</i>	エンビシキチヨウ	2-051
04-13	吉祥鳥	白腰文鳥	<i>Lonchura punctulata</i>	シマキンバラ*	2-042
04-14	五更鳴	高山嶺雀(中國有七亞種)	<i>Acanthis flavirostris</i>	キバシヒワ*	2-063
04-15	西寧白	高山嶺雀(冬羽)	<i>Rhodopechys githaginea</i>	ナキマシコ*	
04-16	偷倉	白腰文鳥	<i>Lonchura striata</i>	コシジロキンバラ	
04-17	長春花鳥	黑領椋鳥	<i>Sturnus nigricollis</i>	クビワムクドリ	2-043(長春花鳥一名 萬春鳥)
04-18	嘉雀	樹麻雀	<i>Passer montanus</i>	スズメ	1-074(嘉雀一名嘉實)
04-19	白嘉雀			白化個体?	
04-20	花嘉雀	栗腹文鳥(黑頭文鳥)	<i>Lonchura malaccensis atricapilla</i>	ギンバラ(亞種キンバラ)	
04-21	黃雀	黃雀	<i>Carduelis spinus</i>	マヒワ	
04-22	山雀	赤翅沙雀(沙雀之一種)	<i>Passer rutilans</i>	ニュウナイスズメ*	
04-23	鶲鶲	鶲鶲	<i>Coturnix coturnix</i>	ウズラ	2-030
04-24	北牛鶲	林三趾鶲	<i>Turnix sylvatica</i>	ヒメミフウズラ	
04-25	南牛鶲	黃脚三趾鶲(母鳥)	<i>Turnix tanki</i>	チョウセンミフウズラ	1-078(南牛鶲即鶲鳥)
04-26	白翎	二斑百靈	<i>Melanocorypha mongolica</i>	コウテンシ*	
04-27	阿蘭	短趾百靈	<i>Alauda gulgula?</i>	タイワンヒバリ?*	1-039(阿蘭一名阿盞)
04-28	米色阿蘭	亞洲短趾百靈(新疆亞種)	<i>Calandrella rufescens (C. cheleensis)?</i>	コヒバリ?	
04-29	鳳頭阿蘭	鳳頭百靈(東北亞種)	<i>Galerida cristata</i>	カンムリヒバリ	
04-30	鳳頭花阿蘭	雲雀		?	

学名・和名は、下記の文献およびサイトに基づいて筆者が推定したものである。*は、「鳥類古今名称参照表」と見解が異なることを示す。また、♂♀については特に必要な場合を除き示していない。

鄭作新『中国鳥類分布名録』(第二版)科学出版社, 1976

山階鳥類研究所編『世界の鳥の和名: VIII. 一中国の鳥(改訂版)』1983

菅原浩・柿澤亮三編著『図説日本鳥名由来辞典』柏書房, 1993

宇田川竜男『銅鳥・家畜』(標準原色図鑑全集18)保育社, 1971

『中国野鳥図鑑』翠鳥文化事業有限公司, 1996

約翰・馬敬能(John MacKinnon)他『中国鳥類野外手冊』湖南教育出版社, 2000

Forshaw, J.M. *Parrots of the World*. New York, Doubleday & Company, 1973

World Birds Index (http://www.atori.co.jp/birds/dic/search_birds.html)

【表2】満洲語鳥名の各種辞書への採録状況

卷-No.	漢語名	満洲語名	大清全書	清文彙書	増訂清文鑑／清文補彙	増訂清文鑑／清文補彙の鳥名
01-01	鳳	garudai			○	
01-02	鶯	garunggu			○	
01-03	孔雀	tojin	○	○	○	
01-04	開屏孔雀	huwejengge tojin			▲	huwejehengge tojin
01-05	鶴	bulehen	△	△	○	
01-06	灰鶴	kürçan		△	○	
01-07	小灰鶴	ajige kürçan			○	
01-08	藍	lamurcan			○	
01-09	北喜鵲	amarginge saksaha	*	*	補○	
01-10	喜鵲	saksaha	△	○	○	
01-11	山喜鵲	alin i saksaha	*	*	○	
01-12	白喜鵲	šahūn saksaha	*	*	○	
01-13	山鷗	alin i jukidun			○	
01-14	黒山鷗	sahaliyan alin i jukidun			補△▲	黒山鷗: sahaliyan alin jukidun
01-15	綻花	giyen gasha			○	
01-16	石青	fulaburu gasha			○	
01-17	鸕鷀	kiongguhe			○	
01-18	沉香色八哥	soboro kiongguhe				
01-19	秋香色八哥	sohokon kiongguhe				
01-20	白八哥	šanyan kiongguhe			補○	
01-21	花八哥	alha kiongguhe			○	番鸕鷀の別名として採録
01-22	燕八哥	cibingga kiongguhe			○	
01-23	山八哥	alin i kiongguhe			△	山鸕鷀
01-24	海八哥	mederi kiongguhe			○	
01-25	番八哥	tubet kiongguhe			△	番鸕鷀
01-26	白哥	cakulu kiongguhe			○	
01-27	瑞紅鳥	sabingga cecike			○	
01-28	灰色洋鴿	fulengginge namu kuwecihe	*	*	○	
01-29	鶲鴿	šanyan kuwecihe	*	*	○	
01-30	毛脚鴿	nunggari fathangga kuwecihe	*	*	○	
02-01	西綠鸕鷀	wargingge niowanggiyan yenggehe			補○	
02-02	南綠鸕鷀	juleringge niowanggiyan yenggehe			補○	
02-03	黒嘴綠鸕鷀	sahaliyan engge niowanggiyan yenggehe			補○	
02-04	洋綠鸕鷀	namu niowanggiyan yengguhe			補○	
02-05	洋綠鸕鷀	namu niowanggiyan yenggehe			補○	
02-06	紅頬綠鸕鷀	fulgiyan šakšahangga niowanggiyan yenggehe				
02-07	柳綠鸕鷀	niowanggiyan yenggehe			○	
02-08	牙色裏毛大白鸕鷀	suhuken bocoi nunggari amba šanyan yengguhe	*	*		

02-09	葵黃裏毛大 白鸚鵡	sohon bocoi nunggari amba šanyan yengguhe	*	*		
02-10	葵黃頂花小 白鸚鵡	sohon bocoi ujui ilha i ajige šanyan yengguhe	*	*		
02-11	牙色頂花小 白鸚鵡	suhuken bocoi ujui ilha i ajige šanyan yengguhe	*	*		
02-12	鳳凰鸚鵡	garudangga yengguhe	*	*	○	
02-13	金頭鸚鵡	aisin ujungga yengguhe	*	*	○	
02-14	青頭紅鸚哥	lamun ujungga fulgiyan yenggehe			補○	
02-15	綠翅紅鸚哥	niowanggiyan ashangga fulgiyan yenggehe			補○	
02-16	翠尾紅鸚哥	niowari uncehengge fulgiyan yenggehe			補○	
02-17	蓮青鸚鵡	šulaburu yengguhe			△	連青鸚鵡
02-18	黃鸚哥	suwayan yenggehe			補○	
02-19	灰色洋鸚哥	fulenggingge namu yenggehe				
02-20	黃丁香鳥	suwayan yenggetu			○	
02-21	綠丁香鳥	niowanggiyan yenggetu			○	
02-22	了哥	cinjiri			○	
02-23	山鸚哥	alin i yenggehe			補○	
02-24	倒掛鳥	sukiyari cecike			△	倒掛鳥
02-25	黑背倒挂	sahaliyan engge sukiyari cecike			補△	黑背倒掛鳥
02-26	珊瑚鳥	šuru cecike			○	
02-27	黃山鳥	alin suwayangga cecike			△▲	黃山鳥: alin i suwayangga cecike
02-28	綠山鳥	alin niowanggiyangga cecike			△▲	綠山鳥: alin i niowanggiyangga cecike
02-29	松鴉	isha	△	△	○	
02-30	白松鴉	šanyan isha	*	*	補○	
03-01	金翅	aisha cecike			○	
03-02	柿黃	hongko cecike			○	
03-03	黃道眉	suwayan faitangga			○	
03-04	淡黃道眉	suntu cecike			▲	sontu cecike
03-05	五道眉	jingjara			△	○
03-06	白道眉	yentu cecike			○	
03-07	畫眉	yadali cecike			○	
03-08	石畫眉	wehe yadali cecike			○	
03-09	山畫眉	alin yadali cecike			○	
03-10	燕雀	cibirgan			○	
03-11	白花雀	šahaltu			▲	sahaltu cecike
03-12	山花雀	alhatu cecike			○	
03-13	金雀	aidana			□	黃鳴: hüwangdana 相思鳥(侶鳳述: ekidun cecike)
03-14	侶鳳述	kidun cecike			△	
03-15	南相思鳥	julergingge kidun cecike				
03-16	粉眼	jinjiba			△	○
03-17	金眼	aisuri			○	
03-18	嗝叭嘴	enggetu cecike			△	嗝叭嘴

03-19	槐串	fenehe cecike	△	○	
03-20	金鈴	honggon cecike	△	○	
03-21	白頭金鈴	cakulu		▲	cakulu honggon cecike
03-22	太平雀	taifintu cecike		○	
03-23	太平雀	taifintu cecike		○	
03-24	珠頂紅	calihün	△	△	朱頂紅
03-25	花紅燕	fulgiyan cibirgan		○	
03-26	花黃燕	suwayan cibirgan		△	黃花燕
03-27	山花燕	alin cibirgan		○	
03-28	南百舌	juleringge kubulin mudangga cecike		補○	
03-29	北百舌	amargingge kubulin ilenggu cecike		▲	amargingge kubulin mudangga cecike
03-30	雌北百舌	amargingge emile kubulin ilenggu cecike			
04-01	藍靛頰	lamuke		○	
04-02	黑靛頰	yacike		○	
04-03	紅靛頰	fulgike		○	
04-04	白靛頰	šeypeke		○	
04-05	靠山紅	fulgiyan sišargan		○	
04-06	金絲麻鶴	suwayan sišargan		△	金絲料
04-07	黃鸝	galin cecike	▲	△	倉庚(鸝黃: gulin cecike)
04-08	鶯雛	deberen gulin cecike	*	*	○
04-09	蛇頭鳥	meihe cecike		△	○
04-10	白頭翁	cakulutu cecike		○	
04-11	白頭郎	cakulu cecike		○	
04-12	雙喜	jurguntu cecike		○	
04-13	吉祥鳥	sabirgan cecike		○	
04-14	五更鳴	yadan cecike		△	○
04-15	西寧白	šanyan sišargan		△	
04-16	偷倉	jeleme cecike		△	○
04-17	長春花鳥	niyengniyeltu cecike		○	
04-18	嘉雀	fiyasha cecike	△	△	家雀
04-19	白嘉雀	šanyan fiyasha cecike	*	*	補△ 白家雀
04-20	花嘉雀	alha fiyasha cecike	*	*	
04-21	黃雀	suwayan cecike			補○
04-22	山雀	alin i cecike			○
04-23	鶲鶲	mušu	○	○	○
04-24	北牛鶲	amargingge ihan mušu	*	*	補○
04-25	南牛鶲	juleringge ihan mušu	*	*	補○
04-26	白翎	hoihon			
04-27	阿蘭	wenderhen	▲	△	○
04-28	米色阿蘭	suhun wenderhen	*		△ 灰色阿蘭
04-29	鳳頭阿蘭	saman cecike	△	△	○
04-30	鳳頭花阿蘭	alha saman cecike	*	*	○

○: 漢語名・満洲語名とも一致

『鳥譜』と異なる場合のみ
注記

△: 漢語名が異なる

▲: 满洲語名が異なる

□: 『鳥譜』に見える別名のみ採録

*: 形容のない総称のみ採録(増訂清文鑑等については特に示さず)

補: 増訂清文鑑にはなく清文補集に採録